

「ちきゅうぎ：アメリカ研修派遣について」

須波 雅一

はじめに

私は 2008 年 4 月に 1 ヶ月間という短い期間ではありましたが、国際ロータリー・ロータリー財団の研究グループ交換留学（GSE：Group Study Exchange）プログラムに参加する機会をいただき、アメリカ・ケンタッキー州にホームステイ留学させていただきました。その際の体験談を寄稿させていただきます。

国際ロータリーとは

日本において国際ロータリーの知名度は高くはありませんが、200 カ国・地域に 32,000 以上のロータリー・クラブを持ち、会員総数は 120 万人を超える国際的組織です。現在、日本全体でのクラブ数は 2,300 クラブを超え、会員数も 10 万人超となっています。

ロータリーの主な目的は地域社会や職場、および世界での奉仕にあり、危機下の児童擁護、貧困および飢餓救済、環境、識字向上、暴力といった現代の最も深刻な問題の数々に取り組む地域社会奉仕プロジェクトを計画しています。また、国連をはじめとする非政府組織や各国政府と協力し、ポリオ撲滅にも取り組んでいます。



図 1 2007－08 年度国際ロータリーテーマ

GSE プログラムとは

GSE プログラムとは、ロータリー財団が費用を提供し、事業や専門職務経験の浅い 25 歳から 40 歳までの人々に、文化と職業に関する交流の機会を提供するプログラムです。4 週間から 6 週間にわたり、チームメンバーは滞在国の文化や制度を体験し、自分と同じ職業が海外でどのように実践されているかを観察しながら、意見交換をしたり、個人的な関係や専門職業人としての関係を築いたりします。

今回、私が参加した場合については滞在期間 4 週間、各都市にて一家庭ずつホームステイしながら 8 都市を車で回り、総移動距離は 3,500km に及びました。同じグループのメンバーにはスポーツ自転車製造・販売会社社長、警察官、町役場都市整備課職員・幼稚園教諭がおり、各々の職域関連施設・機関を訪問しました。



図 2 GSE プログラム委員長・メンバーと

プログラムへの応募経緯

私が勤務する病院のグループ会長が埼玉県飯能市にある飯能ロータリー・クラブに所属しており、GSE プログラムへの参加を勧められました。私にとっては 2 泊 3 日の海外旅行ですら、ただ一度しか経験はありませんでしたが、その際に体験した文化・感性の違いによって考えさせられたものは非常に大きいものでした。

その体験をもう一度、更に 1 ヶ月という期間でできるというのは非常に大きな魅力でした。応募資格の中に「一人で海外旅行が出来る程度の英語の能力がある人」との規定があり、また、英語によるスピーチも求められるため、英語が話せない私は戸惑いました。しかし、①当院に在職のまま、②給与が保証され、③渡航および滞在費用も負担していただき、④ホームステイ生活で、⑤異文化交流が出来る、という魅力の前では小さな不安でしかありませんでした。プログラムへの参加を勧められたその席で、迷わず応募を申し出ました。

ケンタッキー州について

成田空港からケンタッキー州への直行便はなく、デトロイト経由で約 14 時間かかりました。日本との時差はケンタッキー州東部で 14 時間、西部で 13 時間あります。

ケンタッキー州は 1792 年にバージニア州から独立し、アメリカ合衆国に 15 番目の州として加盟しました。アメリカ唯一の内戦であった南北戦争の際、合衆国に留まった奴隷州という歴史を持っています。

アメリカ中東部（日本では仙台が同じ緯度線上）に位置し、「ブルーグラス・ステート」のニックネームを持つ牧草州です。東西に約 700km、南北に約 300km という広大な草原が広がる、馬・牛・豚の畜産地、大豆・とうもろこしなどの農業産地です。また、特産品としてはバーボン・タバコ、イベントとして世界最高峰の競馬レースであるケンタッキー・ダービーや、ファストフード店のテレビコマーシャルで知られた「マイ・オールド・ケンタッキー・ホーム」の歌が有名です。その他、世界遺産である世界最長 590km の洞窟を有するマンモス・ケーブ国立公園があります。



図 3 ケンタッキー州の位置



図 4 ケンタッキー州旗

ケンタッキー州での生活

ケンタッキー州滞在中は、ホームステイ生活を送っていました。日中は、5 人のメンバーで行動し、現地のロータリー・クラブ例会に出席して英語でのスピーチを行ったり、競馬場や公園・博物館などを観光したり、現地企業訪問・職業研修という日程を送りました。職業研修の内容は、病院訪問や他メンバーの職域である警察署や行政・教育機関を訪問しました。

ケンタッキー州は土地や家、道路など全ての面においてスケールが大きく、日本での生活が窮屈で忙しないものだと感じました。広大な大自然の中で日本での生活を振り返って考えた中では、日本は狭いからこそ、要領・効率よく工夫する民族として発展したのではないかと思います。自立したり創造したりといった、ところに余裕を持てる広さは足りないのではないかと感じます。



図5 同行メンバーとともに

コミュニケーション

私はほとんど英語を話せませんが、時間が長くかかったり十分には質問が出来なかったりするなどの点以外は、それほど苦勞しませんでした。電子辞書を使いながらではありますが、言語の違いは訪米前に思っていたほど壁にならず、伝えようとする気持ち・理解しようとする気持ちがあれば意思の疎通は図れるものでした。日々、実習生に伝えていることではありますが、自分自身、改めて非言語コミュニケーションの重要性を確認することが出来た経験でした。

ちなみに、私が使っていた電子辞書についてアメリカの方は皆さん興味津々で、「日本人は 4 種類（漢字・平仮名・片仮名・ローマ字）もの文字を使いこなすのか?!」と驚き、「なんて素晴らしい機械なんだ!」と感動され、英語が話せない私も自慢の一品でした。しかし、その“素晴らしい”電子辞書が日本製品ではなく、中国製品であることを伝えると爆笑が起きていました。

文化交流

私は渡米に際して、日本文化を表すものとしてお箸・折り紙と私の趣味である三線（サンシン、沖縄三味線）を持参しました。

日本料理屋で食事をする機会もあり、日本人メンバーが持ち方・使い方を説明しましたが、皆さん使い方に苦労され「アメリカ国民の 60%が肥満。丁度いいダイエットの道具になる」と苦笑いの連続でした。

折り紙については、私が折り紙を取り出した時点で「Oh, origami!!」と皆さんご存知で、鶴を折って見せると「たった 1 枚の紙で?!」と驚き、「いつ折り紙を習うのか?」、「日本人は誰でも折り紙を折れるのか?」など質問攻めに合いました。小学校を訪問した際には他のチームメンバーと共に鶴・蛙・箱などを折って見せ、大勢の子どもに喜んでもらい、その様子は新聞記事にもなりました。

三線については、当院の作業療法士が活動にも取り入れており、沖縄民謡や童謡を患者様と共に歌っているものでもあります。今回、アメリカでも沖縄民謡を披露しました。当然、知らない曲でするので反応は芳しくありませんでしたが、人によっては“三線を弾いてくれたから”とウクレレやピアノを披露してくれました。日本人メンバーも知っている曲を演奏してもらった際には大変盛り上がり、アメリカの音楽を三線で演奏できるように練習しなかったことを悔やむと共に、コミュニケーションには共通項が大切だということを痛感しました。

アメリカでは家族の写真を見せるコミュニケーションがあると聞いていたので、挙式後 6 週間で渡米した私は、妻との教会式の写真を持って行きました。写真を見た誰もが必ず「どこの教会で式を挙げたの?」と質問され、結婚式場で挙式したことやクリスチャンではないと返答するものなかなか理解してもらえず、日本文化は無宗教に近い旨を説明すると、皆さん困惑されていたのが印象的でした。



図 6 新聞記事

病院訪問

今回の研修では4施設を訪れることが出来ました。私が専門とする認知症を持つ人に対する作業療法について、アメリカではナーシングホームでの作業療法ということになるようですが、見学した限りでは認知症を持つ人の身体に対する作業療法のみでした。

ここでは印象に残った作業療法士 Amy とのコミュニケーションについて述べたいと思います。彼女は Flaget 記念病院という総合病院で勤務しています。

病院訪問時、見学の受け入れ担当者が不在であったため、急遽 Amy が担当してくれることになりました。見学開始時、Amy は「そこに座って見学していて」と素っ気ない態度で私を迎え入れました。彼女の業務に同行して会話をしている、Amy は険しい表情をし、早口でまくしたてるなど、明らかに不機嫌でした。

しかし、Amy が行った訓練についての説明に対して私が感想を述べると、Amy は「作業療法士になって何年目なの？」と聞いてきました。私が経験年数を答えると彼女の表情は笑顔に変わり、「普段、日本ではどのような作業療法をしているの？」と聞いてきます。どうやら、日本人は総じて幼く見られるため、経験の浅い作業療法士とされていたようです。ようやく Amy にも笑顔が見られ、お互いに理想と現実のギャップについての悩み、作業療法士の配置規準が低いことや不十分な備品についてなど、筆談を交えながら語り合いました。悩みや不満には共通項が多くありましたが、当院の在籍作業療法士数が規準を超えていることを伝えると、Amy は「うらやましい」と繰り返していました。在籍する作業療法士が一人という Amy は“作業療法士同士”で不満などについて話し合ったことで多少なりともストレスが解消できたのか、私が折り紙で鶴を折ってプレゼントすると、素晴らしい笑顔でリハ室内の患者に見せて回り、天井から吊るして飾ってくれました。

なぜ、Amy とのコミュニケーションが印象に残ったのかについてお話します。前述の通り、私は“文化・感性の違いを知る・感じる”ことを目的に渡米しました。アメリカにおける作業療法の方法や内容、手技・知識などを知りたかったのではなく、アメリカという異国・異文化の中で、作業療法士が何を感じ、何を思い、何を考えているのかを知りたかったのです。他の3施設では時間の制約によって業務内容についてなどの“質疑応答”で終わってしまったため、“意思の疎通”が出来た Amy が印象に残ったということです。



図7 Flaget Memorial Hospital 正面玄関



図8 Amy とともに

高齢者について

今回、4 施設を見学させていただいた感想としては、患者に活気とリハビリテーション（訓練）に対する意欲があると感じました。普段、私が認知症を持つ人を対象としているため、「訓練」に対する意欲がある人が多いという印象を持ったのかもしれませんが、私が感じたことを伝えるとアメリカと日本の保険制度の違いがあるためではないかと説明を受けました。アメリカでは日本のような国民皆保険制度ではないため医療費が高額になるという話でしたが、保険制度だけではなく、「自立」に関する文化の違いも大きく影響しているのではないかと感じました。

アメリカでは高齢になっても親子で同居することは少なく、自分の生活は自分で営むという考えの人が多いとのことでした。これに対し、日本では国の保障制度があったためか、“長年勤め上げたから努力が報われる”という相互扶助の文化によって「自立」が制限されているのではないかと感じました。

私が専門としている認知症を持つ人に対するリハビリテーション・ケアについては、まず、「認知症（Dementia）」という言葉を知らない人が多いことに驚きを感じました。また、日本でもようやく「痴呆」という言葉から「認知症」という言葉に置き換えられ、イメージが変わってきたばかりではありますが、認知症者に対する差別的な発言が多かったことが残念でした。



図9 ナーシングホームの食卓

感じたこと

今回、私たちメンバーの集まり方は、非常に興味深いものであったと思います。子どもの教育に携わる者、その子どもを含む“ひと”が住む街づくりに携わる者、その街の治安維持に携わる者、高齢者の医療に携わる者。各自の職種が「ひとの生活に携わる者」というひとつの線で結ばれているように感じました。作業療法士以外の人と出会い、多くの時間と行動を共にし、語り合い、友達となれたことは何よりも大切なことです。それぞれの職域において日米の違いを捉え、話し合ったことも貴重な経験でしたし、各職域において多くの違いがあり、文化も異なるにもかかわらず、抱えている課題が日米で似通っているという点も興味深い点だと思います。

日本に帰国し、多くの人に GSE プログラムについて話すと「日本とアメリカ、どっちがよかった？」と聞かれます。しかし、日本とアメリカを比較する・優劣をつける必要はないのではないかと思います。当然、日本文化とアメリカ文化には多くの違いがあります。日本には日本の長所・美点があり、アメリカにはアメリカの長所・美点があります。しかし、それは日米それぞれの文化・国民性で育んできた長所・美点なのではないかと思います。違いがあることを知ったこと、そのことに最大の価値があると思います。

おわりに

海外での1ヶ月間のホームステイ生活は、終わってみれば一瞬の出来事のように感じられます。

プログラムへの参加が決まった際は英語が話せないこと、生活環境が大きく異なることに対する緊張と、慣れた環境・職場から離れることに対する不安が非常に強かったことを思い出します。しかし、ケンタッキー州を訪れて2日程で、その緊張や不安は杞憂に終わりました。コミュニケーションをとる上で、上手に話すことが必要なのではなく、相手を知ることと自分の意思を伝えることが必要なのであり、言語は違っても意思の疎通を図ることは十分に可能であると知ったためです。

また、不安・緊張を補って余りある、多くの人との出会いや別れ、異なる文化や感性を直接肌で感じる事が出来た経験は、非常に貴重な有意義なものとなりました。

今回、この「ちきゅうぎ」への寄稿依頼をいただいた際、“在職のまま、海外研修に派遣される作業療法士がいることを発信してほしい”というお話もいただきました。私が仕事をする際に大切にしていることは、作業療法を批判することです。作業療法士以外の方が、作業療法・作業療法士をどのようにみているのか、作業療法・作業療法士をどのように捉えているのか。作業療法士以外の人から見たら、作業療法はどのようにみえるのか、作業療法士はどのような人にみえるのか、作業療法の理論はどのように聞こえるのか、作業療法業界はどのような集団にみえるのか。以上のようなことを念頭に仕事をしてきました。もしかしたら、作業療法以外を知る・作業療法を外からみるということの結果が、海外を知る・日本を外からみるという海外研修派遣の機会をいただいたのかもしれない。

“作業療法はなかなか理解されない”という話をよく聞きます。理解する側になって作業療法をみると、新たな作業療法観が生まれるかもしれません。

About the training dispatch to the United States

飯能老年病センター

Hanno geriatrics hospital

Masakazu Sunami

URL

Rotary.org: 国際ロータリー. (オンライン), 入手先 <http://www.rotary.org/ja/pages/ridefault.aspx>,
(参照 2008-06-02)

表 1. ケンタッキー州滞在日程

日付	行動
4/3	渡米
4/4	ロータリー・クラブ（RC）例会出席、市役所訪問、資産評価事務所訪問
4/5	機密情報管理施設訪問、馬飼育場訪問
4/6	都市移動
4/7	ケンタッキーホースパーク見学、野球観戦
4/8	ベトナム戦争記念碑訪問、州議事堂見学、歴史博物館見学
4/9	老人ホーム見学、RC 例会出席、高校訪問、市長訪問
4/10	都市移動、州立公園見学、ウイスキー博物館見学、役所訪問
4/11	病院見学、南北戦争博物館見学
4/12	バーボン博物館見学
4/13	都市移動、マンモス・ケーブ国立公園見学
4/14	機械部品製造工場（4ヵ所）見学
4/15	小学校訪問、特別麻薬取締本部訪問、農場訪問、RC 例会出席
4/16	コルベット博物館・組立工場見学、RC 例会出席、交通局訪問、職業訓練校視察
4/17	都市移動、ナッシュビル市内観光
4/18	ナッシュビル市内観光
4/19	都市移動、地区大会プレゼンテーション
4/20	自然動物資料館見学
4/21	都市移動、州立大学訪問、RC 例会出席
4/22	州立公園見学
4/23	都市移動、州立公園見学
4/24	小学校訪問、病院見学、警察署訪問、RC 例会出席
4/25	美術館見学、トヨタ工場見学
4/26	都市移動、野球観戦
4/27	競馬博物館見学
4/28	学校訪問、カーネルサンダース墓地訪問、病院見学、警察署訪問、都市計画事務所訪問
4/29	野球博物館見学、遺跡博物館見学
4/30	帰国（日本時間 5/1）